

縄文人ののこした 16のカタチ

現代縄文アート 堀江武史展

彼の創作の視点は縄文人の残したカタチから出発する。それは石器片であったり土器片である。その残された遺物にこだわり憑りつかれてその破片を創った縄文人の心のヒダをまさぐる。畑地に転がる土器片は耕すたびに碎かれてしまう。消滅する前にそれを拾い上げ、銀箔をまとわせてそのカタチの中心を際立たせる。「この縄文の美しい感動を世界に伝えたい」と希求する彼は、その時現代の縄文人となる。

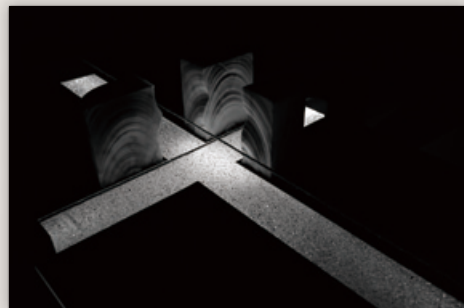
今回の展覧会は、縄文の美の魅力を発掘し続ける縄文アーティストであり、考古学的修復・複製技術者である堀江武史氏の造形の心にスポットをあてる。縄文考古学から紡ぎだす縄文アートの美の世界をどうぞご覧ください。

猪風来美術館 館長 猪風来

三つめの縄の使い方:石を切る

滑石、麻紐、砂、ほか/2013年/43x70.5xH:19cm

香港中文大学の鄧聰さんが中国の出土品で軟玉製の「玦飾」にある、糸と砂による切断痕の研究をまとめ、長野県埋蔵文化財センターの川崎保さんが日本に紹介した。私は川崎さんに誘われて長野県内出土の縄文時代石製遺物、玦状耳飾を観察し、一部に糸切りの痕跡をみとめる発表をした。ヤスリがけにトクサを使っていることもみつけた。この一連の成果を作品にした。玦状耳飾の糸切り痕はヤスリがけで消される運命にあるが、痕跡はとても美しい。



つくる、こわす。のこる、きえる。(三内丸山遺跡出土土偶の場合)

青森県三内丸山遺跡出土土偶レプリカ(石膏)、錫箔、合成樹脂、遺跡の土、木材/2011年/25x14x73.5cm、25x14x72cm

メキシコ大使館「マヤー縄文のルーツ コンテンポラリーアート」展(2012)に出品。レセプション・パーティには150名を超える内外のお客さんが来た。土偶とは何か。なぜ壊れているのか。それを説明するのはとても難しい。



縄文人ののこした16のカタチ

石器、縄文土器破片、錫箔/2009年/147.5x91cm

広い畑地の脇には欠けた石器や細くなった土器がポロポロと落ちている。地主さんの話では昔、土を掘るとゴロンと丸ごと土器が出たそうだ。耕作者にとっては厄介なシロモノなのだろう。耕すたびに遺物は碎かれて、しまいに土になる。それでいいのかもしれない。だが、たとえ小さな断片であっても、制作者のカタチへの思いが私には伝わってきてしまう。消えゆき、忘れ去られる寸前のカタチ。多くの人の目には留まらないカタチ。私はそれを拾いあげて、錫箔をまとわせる。



HORIE TAKESHI 堀江武史

1967年東京生まれ。修復家・府中工房主宰。国学院大学在学中に縄文遺跡の調査に参加。卒業後「縄文のつたえ方」をテーマに活動中。縄文遺物と現代美術を並置したユニークな展示やワークショップを通じて縄文の魅力を追及・発信している。

<ギャラリートーク>

堀江武史氏による展示作品解説

■ 6月8日(日)午後1:30~2:00

<縄文アートシンポジウム>

『縄文スピリットからはじまる新しい創造』

— 考古学と芸術を語る —

■ 6月8日(日)午後2:00~3:30

白井洋輔氏 (日本考古学協会会員・元吉備国際大学文化財学部教授)

堀江武史氏 (修復家・縄文アーティスト)

猪風来氏 (縄文造形家)

■会場

猪風来美術館 2階
(参加費=入館料のみ)

■アクセス

岡山から車で約90分
岡山空港から車で約70分
賀陽ICから車で約45分
新見ICから車で約30分
井倉駅からタクシーで約15分
方谷駅からタクシーで約10分

周辺マップ▶



発掘された縄文時代の遺物が発する不思議な造形と精神波を受けとめてみると、人類の始原のアートの世界が広がっている。宇宙や自然の波動を感受し、生と死と再生への畏怖からくる祈りの世界観が表現されている。アートの根源性がそこにある。縄文時代とはどのような時代であったのか。縄文の心を読み解き、そこからふたたび現代を展望し、アートの新たな可能性を探ってゆくトークを展開する。

考古学的遺物と日々接しながら古のインスピレーションを丁寧にすくいあげて新たなアート作品にしている堀江武史氏、縄文体験をへて現代縄文アート作品を多数創作している猪風来氏、そして文化財学を専門とし世界的視野での研究をしている元吉備国際大学教授の白井洋輔氏。各分野をリードする三者による「考古学と芸術を語る」アートシンポジウムへぜひご参加ください。